

アメリカ聾教育における併用法 (II) — 第1回施設長会議における E.M. Gallaudet の提案 —

上野 益雄

本稿では、1868年5月に開かれた第1回聾啞施設長会議における E.M. Gallaudet の提案を扱う。の会議は、1867年の E.M. Gallaudet のヨーロッパ視察報告を受けて直ちにワシントン D. C. に招集して開かれたものである。

E.M. Gallaudet は、この会議において次の決議の採択を提案した。

「この会議の意見として、発音と読唇の指導を、この訓練によって利益が得られれると思われる生徒に対して十分に授けることは、聾啞教育のすべての施設の義務である」

E.M. Gallaudet はこの会議において発音指導の導入を提唱した。

- 1 彼は、従来の手話法に立つヨーロッパの施設が発音指導を導入したことから、今後併用法へ進むと見ていた。
- 2 口話法による新しい施設の設立が、従来の施設側にインパクトを与え、E.M. Gallaudet も危機感を持っていた。
- 3 従来の手話法による教育理念に立ちながら、社会の進歩に合わせた指導法の変化の必要性を強く感じていた。

彼の提案の背景には、以上のような意図があったと考えられる。

キーワード：聾教育 併用法 エドワード、M.ギャローデット

1. はじめに

筆者は「アメリカ聾教育における併用法 (I)」(心身障害学研究第9巻第2号)において、E.M. Gallaudet がコロンビア聾啞施設の理事会に提出した報告書「ヨーロッパにおいて追及されている聾啞教育方法に関するレポート」を検討した。

彼が6カ月のヨーロッパ視察を終えてそのレポートを提出したのが1867年10月23日である。同じ1867年3月には B.インゲルスマン (Bernhard Ingelsmann) によって口話法の施設 (New York Institution for the Improved Instruction of Deaf-Mutes)¹⁾がニューヨークに設立され、7月には口話法の中心となるクラーク聾啞施設 (Clarke Institution for the Deaf-Mutes)²⁾が認可されている。

特にニューイングランドを中心に、聾啞教育における口話法に対する社会的関心が高まり、従来

の手話を主とする指導法が見直されつつある状況にあった。すでに1843年のホレス・マン (H. Mann) の報告を受けて、翌年ニューヨーク聾啞院のデイ (G.E. Day) とハートフォード聾啞院のウェルド (L. Weld) はヨーロッパ視察にでかけ、1851年にはさらにニューヨーク聾啞施設の H.P. ピート (H.P. Peet) が息子と共に視察に行っている。彼らの報告では“アメリカの聾啞教育の指導方法はヨーロッパのものに決して劣ってはいない”というものであった。1859年には再度デイがヨーロッパへの視察にでかけた。「半聾・半啞 (Half-deaf・Half-mute) のものには発音指導が可能であり、その他特別な資質を持つものにも発音の指導が可能なものがある」ことをいくらか詳しいデータで示しながらも、基本的にはアメリカの聾啞教育がヨーロッパのそれに比べて劣らないという従来の主張と同じものであった³⁾。しかし

1860年代に入って、時代の流れは従来の手話法の見直しが迫られる状況にあった。コロンビア聾啞施設の理事たちは、施設長 E.M.ガローデットをヨーロッパへ派遣した。6カ月間の綿密な調査の結果による報告および彼の教育理念については、すでに見たとおりであるが、本章の必要上、簡単に要約してみると次の通りである⁴⁾。

E.M.ガローデットは、そのヨーロッパ視察報告書において、従来の手話・指文字による教育方法の改善を求めて「併用法」を提唱した。

その内容は、

「人工的スピーチ指導を、それが不成功と分かるまではすべての生徒に指導すること」であった。彼は当時のヨーロッパの聾啞施設を

- ① 手話・指文字の使用を主体とする施設
- ② 発音指導を主体とする施設
- ③ 手話・指文字の指導と発音指導を併用する施設

の3つに分けこのうち③のグループの施設に注目した。

この③のグループをさらに2つに分けて、

- a) 手話法の伝統に立ちながら発音指導を併用する施設
- b) 発音指導の伝統に立ちながら手話・指文字を併用する施設

とし、特に a) の施設を評価した。

彼は「もとのハイニッケの理論を基盤とする施設はひとつもない」と見ており、今後の聾教育は併用法へ進むものと推測していた。

彼の教育理念は、一見考えられるように、発音法の理念つまり口話法の理念というものに近づいたものではない。発音指導の導入を勧めた彼の指導法(彼のいう上部構造)は、口話法に近づき口話法と同じように見えるが、その教育理念(彼のいう基礎構造)は、手話・指文字を聾教育において必要なものと認めた手話法の教育理念と同じものであり、手話による指導が発音による指導より一段劣っているものという発想はなかった⁵⁾。

従って彼の考え方は、口話法の理念とは全く異なった理念に立ったものであった。

E.M.ガローデットは時代の流れを読み取っていた。ヨーロッパ視察より帰り、コロンビア聾啞施設の理事たちに報告書を提出した翌年1868年5月に、第1回の全国聾啞施設長会議を招集し、そこで彼の提案を発表した。

本稿では、この施設長会議における E.M.ガローデットの提案について見ることにする。この会議において採択された決議は何を意味するのか、E.M.ガローデットの提案の背景にはどのような意図があったのか。以上の点について検討する。

2. 社会的背景

1) 手話から口話への流れ

9世紀末から20世紀に入ってつい十数年前まで、手話は少なくとも公的な学校教育の場では禁じられた内密の言葉であったという背景をもっている。教育史の表面では口話法が主流であり、その成果がクローズアップされた。教育の現場では手話について何か発言することは次第にタブーとなっていく⁶⁾。手まねによるコミュニケーションや思考は、聾児の概念形成や思考過程を健聴児と異質にするばかりでなく言語指導にも鉄壁の障害になると考えられ、このような思考の異質性、自己中心性、社会性の未熟、学習困難といったものが、すべて手まねによるものとされていた。口話法が純粹口話法として手話を完全に排除していったその源は、アメリカにおいては1860年代のこの聾教育方法の変動期にある。

アメリカの聾教育は1817年のハートフォードの聾啞施設の設立より、1867年のクラーク聾啞施設の設立まで手話法の時代として特徴的な、まとまった一つの時代を作っている。この60年代に口話法の運動が起こり、従来の聾教育施設は併用法へと徐々に移行し、聾教育界は口話法と併用法の葛藤を経てやがて口話法の優位へと向かっていくのである。アメリカの聾教育はヨーロッパのそれに比べて口話法に統一されるのが遅く、さまざまな方法がなされていたことで知られているが、併用法と口話法の誕生という時代の転換期として1860年代の時期は重要な位置を占めている。しかし社会的な状況を見た場合、この時期に至る準備はすでに19世紀の30年代より整えられつつあったのである。聾教育はさまざまな社会現象の変化の後について進んだのである。

さて19世紀から20世紀前半という時期を区切って考えた限りでは、手話から口話への変遷と捕らえることができる。そして1960年代後半からのトータル・コミュニケーションへの移行の事実を考えると、手話法から併用法ないし口話法への移行に対して、口話法からトータル・コミュニケー

ションという逆の方向でへの転換期として、非常に類似した時期であると考えられる。

2) 変化する社会

19世紀はアメリカがヨーロッパの伝統を受け継ぎながら、アメリカ独自の文化を作り上げる時期であった。社会発展の時代として特徴づけられ、交通・産業の発展、教育・文化の将来への希望に膨らんだ時代がすでに始まっていた。たとえば、1802年 T.H.ガローデットがエール大学の入学試験に向かう時には、馬車であったのが、1844年にはボストン―アルバニー間とともにハートフォード―ニューヨーク間の鉄道が開通している。末息子 E.M.ガローデットが正式に聾啞教育の教師になったのが1857年であり、社会の変化につれて聾啞教育も変わろうとしていた⁷⁾。すでに1830年代よりマサチューセッツ州を中心にコモン・スクール設立の運動が始まっており、幾多の反対に会いながらも初等教育の普及を目指すこの運動は、徐々に一般に受け入れられ着々と広まっていった。宗教的にはオーソドックスなピューリタンの信仰の時代からハーバード大学を中心としてユニテリアンの信仰が益々優勢となり、理性的な信仰の時代へ入っていった⁸⁾。このことは、科学技術の発展の促進、非宗派性の主張、宗教教育の軽視へとつながっていった。カルヴィニズムの厳格な“予定説”と原罪の信仰を放棄して、個人的・人格的宗教に移行し、人間の人格に対する深い尊敬をいさぐユニテリアンイズムは「怒り嫉妬する復讐的・独裁的神から、恩情ある慈悲深い神に移った。・・・各人は聖書と自己自身を守ることによって、自己の救済の成就できる世界に移った。それは啓蒙時代の楽観的信条と将来に期待する社会的諸理想とを社会の改善に捧げるキリスト教のリベラルな信条に関連づけられた。このようにして、ユニテリアンイズムは、公立学校設置運動もその一部である19世紀初期の社会改革運動を促進するのに貢献した」⁹⁾聾啞教育はこれらの動きに引きずられていく形をとった。

産業革命の影響によって人口の都市への集中化、貧困者の増大などの社会矛盾が顕在化するとともに、さまざまな発明・発見が人類の将来にばら色の期待を与える時代でもあった。知識と技術が増すことによって、人間の福祉と幸福が実現されるべき時代でもあった。南北戦争をはさんで東部の工業化は以前に比べ著しい発展を示し、やがて農

業国から工業国への移行する出発の時期でもあった。すでに1840年代 W.E. Channing は古い宗教でなく新しい人道主義と社会改革をめざす宗教を叫び、口話法を推奨した Horace Mann はアメリカの文明を蝕む文盲をなくし民衆が知識と技術をもつことが社会の改善に役立つことを説いた¹⁰⁾。Mann とともにヨーロッパを視察した S.G. Howe は、手話法を厳しく批判し口話法の施設の設定運動をバックアップした。口話法による施設の設定運動を進めた G.G. Hubbard や F.B. Sanborn らは彼らはすべて R.W. Emerson を中心とするコンコード・グループのメンバーたちであった。それに対して従来の施設の教師たちはオーソドックスな会衆派や長老派に属するピューリタンたちであり、あまりにも保守的であった。

しかし、これら施設の教師たちの間にも、手話体制の中でさまざまな意見が出され必ずしも教育方法に関して一致した意見ではなかった。まさに変化する時代の前夜であった。しかし聾啞教育における手話の位置付けをめぐる討論の中で、施設の指導者のおおかたの意見は、発音指導の実際の可能性については否定的であった。若い E.M.ガローデットは、時代の空気を感じており、聾啞教育も新しく変わらねばならないという実感を持っていた。

3. E.M.ガローデットの提案

1) 15年後の E.M.ガローデットの記述

1883年 Encyclopædia Americana (Supplement to the Encyclopædia Britannica) に E.M.ガローデットは“History of the education of the deaf in the United States”を書いている。この中で彼は、アメリカの聾啞施設の発展を記述すると同時に、「併用法に至る一連の発音指導に関する流れ」を次のように見ている。

1843年 H. Mann による「ヨーロッパ聾啞教育」の報告が、聾啞施設側に大きなインパクトを与えたこと、S.G. Howe が G.G. Hubbard, F.B. Sanborn らの口話法による聾啞施設の設定運動を助けたこと、そして遂に1867年6月クラーク聾啞院の解説を見たことを先ずあげている。第2にニューヨークの B. Engelsmann による口話法の学校が1867年3月クラーク聾啞院よりも早く開かれたことを述べている¹¹⁾。第3の事項として、彼自身のヨーロッパ視察とその報告について記してい

る。

「1867年10月23日理事会への報告書においてガローデット学長は、それ以前にニューヨークおよびハートフォードから派遣された紳士たちとは異なった見解をとった。彼の父と同じように手話法の優位性を認めながら、もし聾者の全体が一つの指導法を取るとするならば、大部分の聾者には話すことと唇を読むことを教える実践がなされることを認め、そしてアメリカのすべての学校における指導分野として発音の導入に賛成した」¹²⁾

1868年に招集した第1回の施設長会議については、

「現在アメリカにある25の施設から15名の施設長が—2名の前施設長 (Drs. H. P. Peet と Turner) と1名の副施設長と共に—1868年5月12日から5日間の会議に参加した。聾啞教育の問題に関する重要な多くの事項が扱われたが、発音の問題が重要な位置を占めた。十分な討議の後、次の決議が全員一致で採択された。

決議：この会議の意見として、発音と読唇の訓練によって利益が得られると思われる生徒に対して、この訓練を施す適切な手段を講ずることは、聾啞教育のすべての施設の義務である。

ノーザンプトンとニューヨークの口話法の学校の設立と関連して採択されたこの会議決議は、アメリカの口話教育の問題に非常に大きな影響を与えた」¹³⁾

彼の記述を見ると、1868年の会議における提案から引き続いて、彼が発音の指導に対して積極的な姿勢を取り続けたことがわかる。聾啞施設において発音に対する関心は益々高まって、教師にも親たちにもその指導が必要と感じられていたので当然そのように考えられる。

しかし、後程考察しなければならないことであるが、この会議で提案されたもう一つの事、“聾啞者全員に発音指導をすることについての異議”については彼はここに記していない。いま述べたように、1880年代になると聾教育において、徐々に発音の指導もなされるようになって行きつつあった。従って発音指導に否定的な発言は落とされていったのも頷けることである。従来聾教育史においても上にあげた事項のみが定着し記述されて来た¹⁴⁾。この会議における討論は、本論文では扱われ

ないが次の課題として扱われなければならない問題である。

ともかく E.M.ガローデットの提案は、上に記したものであり、どうにか全員の承諾を得て採択されたことは事実である。

2) E.M.ガローデットの指摘するアメリカ聾啞教育の欠点

さて、1868年の施設長会議において、E.M.ガローデットはアメリカの聾啞教育の欠点を3つあげている。

① 教育開始年齢のおそいこと

聾啞施設の教育者たちは教育開始の年齢は10歳から12歳が適当であるという考えであった。しかしガローデットは、10歳の入学ではおそいという。普通の子供はすでに幼いころから言語を学んでおり、しかも聾啞児よりももっと早い年齢で学校へ行く。それに対して、聾啞児は10歳まで知識は殆ど白紙の状態であり、それから正式な教育をしなくてはならない。施設が始まったころは、聾啞教育は一般にその可能性も疑問視されていたが、今では聾啞児の教育は誰にでもその有用性が認められ、権利としても認められるようになることが必要だと彼は主張している。

普通の子供たちが両親の下で自然に覚えることばを、聾啞児たちは苦勞して身につけなければならない。だからこそもっと早くから教育が必要であると彼は考えた。従来の施設の教育者たちは、小さいときは両親の愛情の下にいるのがよく、まだ施設での訓練には耐えられないから、知的な訓練や職業の訓練のためには10歳以後がよいという考えであった。それに対して幼児期からの教育の必要性は口話法の学校によって特に強調されたことされたことであった。E.M.ガローデットはこの点においても教育の新しい変化を見通していた。彼は4年間の初等教育と6年間の高等教育の課程を提案した¹⁵⁾。口話法を標榜したクラーク聾啞院は5歳からの幼児の指導を考え受け入れる姿勢をとっていた。

幼児教育に関しては、もう一つ注目すべきことがある。ニューヨーク聾啞院の教師であった D.E. Bartlett は、1852年そこを退職しみずから自宅を解放して幼児学校を開いた¹⁶⁾。この教育は1854年には Private School として実践がなされたが、残念なことにアメリカにおいてはこの早期教育の実践は定着しなかった。時代はまだこの実践を受け

入れるまでに熟していなかった。E.M.ガローデットはヨーロッパ視察の際、リバプール聾啞院の幼児教育部門を観察して感動した経験を持っていた¹⁷⁾。

② 手話が使われ過ぎていること

E.M.ガローデットにとってはこの会議の主要な目的はこのことであった。手話が使われ過ぎていること、そして発音の指導がなされていないこと、これが彼の問題として取り上げることであった。「手話があまりに使われ過ぎる」¹⁸⁾ということ、これまでも幾度か言われて来た。彼はこの手話がいかに使われ過ぎているという発言の裏に、発音指導が必要であるという勧告を持っていた。というのは従来は、手話が使われ過ぎているという背後には必ず指文字を使用することが望まれていたのである。もちろんE.M.ガローデットも指文字の使用を勧めていた。

手話は簡単であり、正確に物事を表現できる美しいものであった。だから教師も生徒も絶えず手話を使用するという強い誘惑を持っていた。片方で書記言語の習得の不十分さが指摘され、そのことは手話に頼りすぎることが原因であると見なされていたが、一方では手話が必要とされ大切なものという評価が与えられ、日常のコミュニケーションでは教師にとっても生徒に取っても欠かせないものであった。

「手話の価値を決して低く見るものではない、否むしる聾啞教育のそれぞれの指導段階において、重要なものであると見るものであるが、新しい言語の獲得においてはその訓練において可能な限りの機会が与えられるべきであると考えている」¹⁹⁾

彼は、聾啞者の人工的言語つまり音声言語の獲得のためには、あらゆる機会をとらえて絶えず訓練する必要があるという。そのためには手話の使用はマイナスであった。

「新しい言語に優先権を与えるべきである。このところで我々の施設の誤りがあると考ええる。教員も職員もあまりに自由に手話を使い過ぎている。生徒たちは、そのコミュニケーションの多くにおいて指文字の学習をした後までもずっと長く手話の使用がなされている」²⁰⁾

聴児が外国にいる場合その国の言葉を使わざるを得ないのと同じように聾啞児も英語に慣れることが必要であると考えた。

③ 教師の質の低下について

教育の経費を安くするためによい資質の教師が得られていないとE.M.ガローデットは言ったが、教師の中には反対する意見も見られた。ここではそれほど深まった議論にはならなかったので扱わないが、彼の意見では、初等学校の教師だからと言って低い教養でよい筈はなく、聾啞教育においても高い教養とよい資質を持った教師が必要であると述べている。初期の聾啞施設の教育における言語指導のレベルが今乗り越えられていないと見ていた²¹⁾。

3) E.M.ガローデットの提案

彼は従来の伝統的な指導法にこだわる必要はないという。先輩に義理立てして従うことはこの自由な国アメリカにおいては不必要であるという。「発音が今まで採用されたことがないからその要求を拒否する」ということは無意味であり「ドイツ法はフランス法に劣っている」ということに固執して発音法に反対することも誤りであるとした。もしハイニッケの方法に価値を見いだしたならば、それを実践すべきであると主張したのである²²⁾。彼はブラッセル女子校のHon. Canon DeHærneの言を引用している。

「(フランス法ドイツ法の両方にその役目がある。一方はもう一方を完全に排除するものではない。一方はもう一方を決して損傷させない。もしお互いにその罪をなすりつけるならば、それぞれがその価値を下げるのである」²³⁾

むしろ二つの方法を結び付けることは利点を増すとE.M.ガローデットは言う。先ずパントマイムの言葉が聾啞教育の基礎であることはいうまでもないことであった。この従来のシステムに発音と読唇の指導を加えることを勧告した²⁴⁾。

ニュー・イングランドにおいて、一般の人々の関心がこの聾啞教育における発音の指導に注目されるようになっていた。E.M.ガローデットはこれまでの教育方法では時代の要求におくれてしまうと感じていた。彼はこの会議において出席者に次のように問いを投げかけた²⁵⁾。

- ◇ われわれのこれまでのシステムに欠点はなかったか。
- ◇ 生徒は言語獲得において失敗していないか。
- ◇ 聾啞者は手話や教師に頼る傾向はなかったか。
- ◇ 不適切な教師が経費節減のため雇われてい

なかったか。

- ◇ 初等教育の期間が短すぎはしないか。
- ◇ 幼時学級の必要性はないか。
- ◇ 聾啞児の3分の1には発音と読唇が有効なものにならないか。
- ◇ もし発音と読唇が有効なら、我々システムは改良し易いと考えてよいのではないか。
- ◇ 時代おくれだと主張する者が正しくないと言えるか。

幸いにも、現在のアメリカの聾啞教育のシステムの欠点は除き取る。確固たる哲学の上に立てられたアメリカのシステムは誰も論破できないが、しかし指導法は改善されねばならない。現在の施設の「これまでの威信は危機にある」²⁶⁾と訴えた。よい方法はたとえ反対の哲学に立つものでも取り入れるべきであると考えた。

最も重要な問題は「発音のシステムを注意深く分析し、恐らくいや明らかに価値があり聾啞教育において注目され一般社会の要求を満たすこれらの要素を信じて受け入れ採用するか」²⁷⁾あるいはハイニッケとド・レベという敵対関係にあった従来の考え方によって頑なになるかのどちらを選択するかであると訴えた。彼はもう今や発音と手話の二つの方法は敵対関係でなくなっていくと見ていた。だから「両方の主張者がかつては敵対関係にあった二つのシステムの利点を結びつけるのに同意し始めている」²⁸⁾と把握していたのである。

発音指導の導入は、ヨーロッパにおける聾啞施設において徐々に増え続けていること、従来手話法によっていた施設が発音導入を始めたこと、発音法を重んずる施設にあっても手話が考慮されていたことなどから E.M.ガローデットは、アメリカの施設においても発音指導の導入が望ましいと判断した。発音指導に対する一般の人々の関心が高まるにつれて、聾啞教育の方法がこのままではすまされないという危機感を持っていた。このような観点に立って発音の指導を取り入れることを提案したのである。

4. 考 察

1) 手話法の評価の上に立つ発音指導

1843年の H. Mann と S. G. Howe のヨーロッパ視察を受けて、1844年には E.G. Day および Lewis Weld のヨーロッパ視察そして1851年の H.P. Peet とその息子のヨーロッパ視察そして、

さらには1859年には再度 E.G. Day のヨーロッパ視察とそれまで何回かに互って聾教育者たちがヨーロッパの聾啞教育を視察してきた。これらの人々の報告に共通することは「ヨーロッパの聾啞教育に比べてアメリカの聾啞教育は全体として決して劣ってはいない」ということであつた。これらの報告では、“半聾・半啞 (Half-Deaf・Half-Mute, ㊦現在の難聴と中途失聴)のものについては発音の指導は有効であり、ごくわずかな特別な資質を持つ場合のみ聾啞者では有効であろう。”ということがつけ加えられていた。アメリカの施設でもこれを受けて発音の指導の試みがなされはしたが、それほど熱心に続けられることはなかった。ハートフォード聾啞院でもニューヨーク聾啞院でも正規の課程の中に組み入れられることはなかった。Day の最後の報告はそれでも前のものよりも詳しいデータが盛り込まれており、発音指導についていくらか前向きな方向が伺えるのであるが、全体の主張としてはそれまでの報告と同じ調子と見ることが出来る。E.M.ガローデットのヨーロッパ視察の時期はそれまでと状況が違っていた。ドイツでは1840年代に入って M. Hill によって発音の指導が新しい装いをもって始められ注目されていた。多くの聾啞施設で発音指導への関心が起こりつつある時期であつた。殊に従来手話の伝統に立っていた施設において発音の指導が取り入れられるようになった施設が E.M.ガローデットの注目するところであつた。彼は社会的な変化と要求を感じていた。

「ニュー・イングランドにおける一般大衆はこの2・3年の間に起こった聾啞教育の事柄に非常に関心を抱いている。・・・あちらこちらで、我々のシステムは改良し易いという意見が見られる。多くの知識人はこのシステムを時代おくれであるという印象を持っている」²⁹⁾

と言っている。彼は自分の考えを提案するに先立って、アメリカの聾啞教育が優れた基盤の上に立ったものであることを強調した。

「この50年の間に24の施設が設立されたが、それぞれが独立して立派に組織されており、1816年に T.H. ガローデット博士によってこの国に導入されたシステムを基本的に変えることなく維持し続けている・・・このように広く行き渡り長く続いた調和というものが、ヨーロッパからの劣ったシステムを偶然に移入した結果

であるということはある得ない」³⁰⁾

と言っている。

彼は、アメリカの従来の施設が取ってきたシステムを基本的には承認し評価しているのである。その上で時代の変化に対応した方法を求めたのである。新しい二つの口話法による施設の出現によって従来の施設が脅かされるものではないことを強調した。もちろん彼のこのような発言の背後には、これまで聾啞教育のために働いてきた先輩教師たちへの配慮もあった。発音指導を提唱するにあたって決して発音法によって立っていた理念に自分の考え方が変わったのではないことを言うておく必要があったのである。

手話の伝統に立つフランスにおいても、ド・レペの方法は変化し発音指導の取り入れられていることを述べ、同時に発音法の伝統に立つドイツにおいても逆に手話を取り入れている施設が多く、イギリスにおいても同様であることを述べながら³¹⁾、アメリカの聾啞教育だけが手話のみの方法によるのは時代おくれであると見ていた。

2) 手話法の理念に立つ併用法

E.M.ガローデットの教育理念は手話法のそれに立っていた。従って手話が聾啞者にとってなくてもよいものとは考えていない。手話が人格を歪めるものという考えも全くない。ただ音声言語の習得にもっと力を入れることを望んだのである。発音指導によって利益を得るものがそのまま放置されることは望ましくないと考え、出来る限り発音指導を有効に用いようと考えた。だからすべてのものに指導の初期の段階では発音の指導を試みることを望んでいた。そこではもし発音法によって利益が受けられないとわかった場合でも落伍者であるという考えは全くなかった。このことは口話法の理念に立つ場合と対照的である。口話法の理念に立つ場合は、発音のできることが人間として正常な姿であると捕えられていた。併用法の考え方が手話の存在を肯定し、手話を使わないようにと言いつつも、聾啞者の言葉としてそれを認めたところに発音の指導における不徹底さがあり、発音指導の成果が上らなかった原因があった。このことが口話法も側からの批判となり、併用法も結局は手話法と同じであるということに見なされた。しかし口話法の主張者が聾啞児の言語教育に楽観的であったと同時に、併用法の立場に立つE.M.ガローデットも楽観的な面が最初は

あったと思われる。

ともあれ、彼の理念が手話法のそれに立っていたにも拘わらず、他の同僚の教師たちには必ずしも正しく彼の立場が理解されたとは限らなかった。おおかたの関心が理念より先に実際の指導法に集中したからであった。彼のいう基礎構造が手話法の理念であり、彼のいう上部構造がニュートラルな（無色の）方法としての口話法であるということは、この時代にあつては教師たちに理解されることはなかなか難しいことであった。この点については各施設の反応、教師たちの討論等においてさらに明らかにされることだろう。

3) E.M.ガローデットは、これまでの教育者たちのヨーロッパ視察報告をどのように解釈したか。これまでの施設の教育者たちのヨーロッパ視察の報告については、先に見たように、おおかた“アメリカの聾啞教育の方がヨーロッパ聾啞教育よりも優れている”というものであった。しかしE.M.ガローデットはそれまでの報告の中の発音指導に関することに注目した。1844年のL. Weldの報告においても

「・・・ヨーロッパの教育者の証言では、聴覚とスピーチが部分的に剝奪されている者の場合は発音の指導が望ましい」³²⁾

という箇所を引用した後、さらに続けて

「なお、公正な実験の利益から除けない他のクラスがある。数としてはごく僅かであるが、特に天性の能力を持っているものがある」³³⁾

と引用し、発音指導についてのところを注目している。

パリ聾啞院のL. Vaisseは後に口話法の主張者になる人物であるが、E.M.ガローデットは彼が発音法を導入したことを評価している。L. Vaisseは、

「・・・発音はかつて話す経験を持ったことのあるものには教えられるし、いくらかの聴力を持っているものにも教えられる。さらに聴力がなくても、鋭敏な知覚を有するものは視覚と触覚によって教えられる。これらの生徒の数は全体の3分の1か時にはそれを上回る」³⁴⁾

と言っていることに注目している。

彼は、特に1959年のDayの二度目の報告について次のところを引用して発音指導に対して注意を向けている。

「聾啞者の何割かは十分な時間と労力によつ

て、多少の利益をもって機械的に発音することおよび唇を読むことが教えられる。このクラスは半啞のもの、話すことなどを学んだ後に聾となったもの、さらに特別な精神的・肉体的な資質を持ったものが含まれる」³⁵⁾

「・・・興味本位の証言にせよ、正しくない判断にせよ、それらの人々の根拠のない断言や誇張された報告であっても、話し言葉をそれによって確実に利益を確実に受けると思われる聾啞者に特別に教えねばいけないという義務感を呼び起こすならば、重要で望ましい結果が保証されるであろう」³⁶⁾

つまりどんな聾啞者にもすぐに発音の指導ができるようになるのかという誇張された情報があるにしても、だからと言ってすべてを退ける必要はないのであって、もし真剣に指導を試みるならば、それによって利益を受けるものが何割かでもあるというのである。以上の Weld や Day の引用から E.M.ガローデットの次のような見解を示しているのである。

「まったくド・レペの原則に立脚した紳士たちから、またアメリカとフランスの方法に共感を示していた紳士たちから、ドイツの方法に以前から反対していた紳士たちから、聾啞教育に長い実践の経験を持つ紳士たちから発音指導を支持する強い証言がなされているのを考えると、驚かずにはいられないことである」³⁷⁾

彼は最初のヨーロッパ視察の報告から24年間、正規に公正な実験がなされてこなかったと訴えたのである。そして手話法に立つ施設の側から発音が有効な場合があるという報告がなされているということに注目させながら、自分の主張していることは決して伝統的なアメリカの考え方に反してはいないと理解を求めたのである。もちろん彼は全体の生徒に対して発音指導が有効であるとは考えなかった。しかし、今日いうところの中途失聴者、難聴者にはもっと発音指導がされ得るとみており、さらに特別な資質を持つ聾啞者も存在する以上、すべてのものに指導の初期の段階では発音指導を試みることを考えていた。(そう考えてはいたが彼のこの会議における提案は、コロンビア聾啞院の理事会へ提出したものよりもずっと穏やかなものになっていることは興味あることである。それだけ気配りが必要であったと言える。)

「口話法による二つの施設ができて、我々

のシステムはゆるがない。またそれらの(口話法による)施設の設立者が希望する効果はあがっていない。逆に手話・指文字を取り入れようとしている」³⁸⁾

と言っている。何度も言うようであるが、彼は両方のシステムは歩み寄るものと判断していたのである。事実クラーク聾啞院では思ったほど成績があがらず手話・指文字をいくらかでも入れることを検討していた。

E.M.ガローデットの提案は、時代の要求に沿うものであった。けれども彼は手話をなくすことが現実的ではないし、発音法の限界をも知っていた。だから、発音指導の効果のないものをも想定したのである。口話法の理念にはそのような想定はあり得なかった。

第5節 残された課題

最初に記したように、この会議における E.M.ガローデットの提案した決議事項は記録では満場一致で採択されている³⁹⁾。しかし実際はもう一つの追加提案が C. Stone より出されていた。この提案をめぐって会議では長時間の討論がなされている。この問題は次のテーマとなるのであるが、その趣旨は、“発音指導は半聾・半啞のものに限られること、先天的な聾啞者に発音を教えることは、ごく希な場合を除いては適切ではない”というものであった。その背後にはこれまでのアメリカの聾啞教育のシステムは、誤りではなかったし今も誤りではないという E.M.ガローデットとは幾分異なった考え方があった。

この C. Stone の提案をつきつめて見ると E.M.ガローデットの提案も無条件の満場一致で採択されたと思えるのは単純過ぎると思われる。この会議ではクラーク聾啞院の発音指導の実践についても関心がもたれ、意見が交わされた。このように議論は活発に行われたが、大勢としては E.M.ガローデットの提案は受け入れられていく方向にあったと言える。次の問題としてこの会議における提案をめぐり討論およびその後の各聾啞施設の反応について見ていくことが残されている。

注

- 1) ウィーンのヘブライ口話学校 (Hebrew Oral School for the Deaf in Vienna) で7年間教師としての経験を持った Bernhard Engelsmann が

- 1866年ニューヨーク市に2・3人の聾啞児の教育を始めた。1867年2月27日市の有力なユダヤ人と聾啞児の親たちがIsaac Rosenfeld邸へ集まった。それは費用の払えないものの子供でもEngelsmannの学校へ送れるようにする相談であった。基金が集められ1867年3月1日この私的の学校は10名の生徒をもって正式に開校した。Clarke Institutionよりも3カ月早く開設された口話法の学校である。現在のLexinton聾学校である。E.M. Gallaudet (1886): History of the Education on the Deaf in the United States, Amer. Ann. of the Deaf, 31 (2), 114.
- 2) Clark Instituionについては、上野益雄 (1976) : アメリカ聾教育における口話法の成立について。東京教育大学教育学部紀要, Vol. 22, 117-128. において扱われている。
- 3) 上野益雄 (1976) : *ibid.*, 118.
- 4) 上野益雄(1984) : アメリカ聾教育における併用法 (I)。筑波大学心身障害学系, 9 (2), 9-19. を参照。
- 5) *ibid.*, 15.
併用法の発想は、手話容認の立場から出たものであり、可能と思われるものには発音法を試みるというもので手話に対するコンプレックスはない。逆に、口話法の立場における手話容認の場合は異なってくるものと考えられる。
- 6) 例えば, Hannah Green (1970); In This Sign, においては口話法の教育を受けた聾啞者の状態についてと手話が隠れた言語であることを描いている。(邦訳, 佐伯わか子, 笠原嘉訳(1974) : 手のことば, みすず書房。「・・・しかし言葉, 本物の言葉は教室の外, 便所のかげで待っていた。手話は表むきは禁止されていたが, それこそは使用者を本当に豊かにするものであった」18ページ)
- 7) 上野益雄 (1981) : 「初期のアメリカ聾教育における手話の役割」(中野善達編「手話の考察」, 福村出版,) 171.
- 8) デーヴィッド・B.バーク著, 紺野義継訳 (1978) : ユニテリアン思想の歴史. アポロン社. S.E.ミード著, 野村文子訳(1978) : アメリカの宗教, 日本基督教団出版局。
フランクリン・H.リッテル著, 柳生望, 山形正男訳(1974) : アメリカ宗教の歴史的展開. ヨルダン社。
曾根曉彦(1986) : アメリカ教会史. 日本基督教団出版局。
柳生望 (1981) : アメリカ・ピューリタンの研究. 日本基督教団出版局. 等参照。
- 9) R.F. バッツ, L.A. クレメン著, 渡部晶, 久保田正三, 木下法也, 池田稔訳(1976) : アメリカ教育文化史. 学芸図書, 189.
- 10) C.ピアード, M.ピアード, W.ピアード, 松本重治, 岸本金次郎, 本間長世訳(1969) : 新版アメリカ合衆国史. 岩波書店240-241.
- 11) E.M. Gallaudet (1886): *op. cit.*, 145.
- 12) *ibid.*, 145-146.
E.M. Gallaudet がこの原稿を書いた1880年代には Institution (施設) という名称ではなく School (学校) という名称に変わる時期であった。The Deaf and Dumb (聾啞者) ではなく The Deaf (聾者) であるという呼び方も同じである。
- 13) *ibid.*, 146.
- 14) R.E. Bender (1960): Conquest of Deafness. においても E.M. Gallaudet の提案のみを記している。
- 15) E.M. Gallaudet (1868): The American System of Deaf-Mute Instruction, Its Incidental Defects and Their Remedies, Proceedings of the National Conference of Principals of Institutions for the Deaf and Dumb, held at Washington D. C., 1868, 50-51.
- 16) D.E. Bartlett (1852): Family Education for Young Deaf-Mute Children, Amer. Ann. of the Deaf, 5 (1), 32-35.
D.E. Bartlett (1854): Private School for the Deaf and Dumb, Amer. Ann. of the Deaf, 7 (2), 124-126.
- 17) E.M. Gallaudet (1867): Report of the President on the System of Deaf-Mute Institutions Pursued in Europe, 16.
- 18) L. Rae (1853): On the Proper Use of Signs in the Institution of the Deaf and Dumb, Amer. Ann. of the Deaf, 5 (1), 24.
- 19) E.M. Gallaudet (1868): *op. cit.*, 51.
- 20) *ibid.*, 52.
- 21) *ibid.*, 52.
- 22) *ibid.*, 55.
- 23) *ibid.*, 57.
- 24) *ibid.*, 58.
- 25) *ibid.*, 59.
- 26) *ibid.*, 59.
- 27) *ibid.*, 54.
- 28) *ibid.*, 55.
- 29) *ibid.*, 59.
- 30) *ibid.*, 48.
- 31) *ibid.*, 47.
- 32) *ibid.*, 55.
- 33) *ibid.*, 55.
- 34) *ibid.*, 55-56.
- 35) *ibid.*, 56.
- 36) *ibid.*, 56.

37) *ibid.*, 56.

38) *ibid.*, 48.

39) *ibid.*, 60.

Summary

The Combined Method in the History of American Education for the Deaf —from a proposition by E.M. Gallaudet at the 1st conference of principals of institutions—

Masuo Ueno

E.M. Gallaudet made a proposal his combined method at the 1st conference, held at Washington D. C. in 1968. He recommended not to use signs too much. He offered the following resolution.

That, in the opinion of this conference, it is the duty of all institutions for the education of the deaf and dumb to provide adequate means for imparting instruction in articulation and lip-reading, to such of their pupils as may be able to engage with profit in exercises of this nature. He proposed introduction of articulation into the education for the deaf.

- 1 . He thought that teaching method will change to the combined method. He observed many institutions in Europe adopted articulation in teaching method. From his observations in Europe he concluded above resolution.
- 2 . New oral institutions gave serious impact to old institutions, and E.M. Gallaudet felt a crisis to old manual method.
- 3 . He supported the philosophy of manualism, at the same time he firmly thought that the teaching method must change to keep up with the social progress.

These are the elements which exist behind his proposal.

Key word: Education for the Deaf, Combined Method, Edward M. Gallaudet